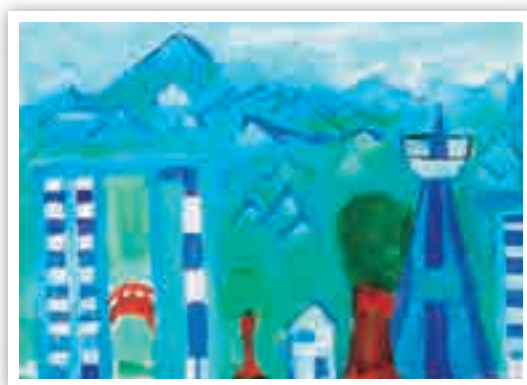


未来の富山市



「私たちの大切な富山市」
富山市立杉原小学校5年 西田 萌莉 さんの作品

●五六年生の部



「緑が豊かな富山市」
富山市立三成小学校4年 中河 蒼真 さんの作品

●三四年生の部



「大きなふん水とプリ飛行機が飛ぶ町」
富山市立大庄小学校6年 森元 空 さんの作品

●五六年生の部



「チューリップのホテル」
富山市立新保小学校3年 村田 萌南 さんの作品

●三四年生の部



「ますのすしをとぼう!」
富山市立水橋東部小学校5年 堀 愛実 さんの作品

●五六年生の部



「未来の新しい市街地」
富山市立草島小学校4年 ラバ 有桜 さんの作品

●三四年生の部

令和4年度 富山市民 感謝と誓いの つどい

とき 令和4年8月1日(月) 午後1時30分

ところ 富山国際会議場 2階多目的会議室

主催/富山市民感謝と誓いのつどい実行委員会・富山市

富山市自治振興連絡協議会
富山市老人クラブ連合会
富山市母親クラブ連絡協議会
富山市中学校長会

富山市社会福祉協議会
富山市民生委員児童委員協議会
富山市PTA連絡協議会

富山市遺族会
富山市児童クラブ連絡協議会
富山市小学校長会



HPIはこちらから

このプログラムは再生紙を使用しています。

未来に語り継ぐ 富山大空襲の記憶

富山大空襲の記憶を未来に語り継ぐため、空襲体験者インタビューや戦禍をくぐり抜けた遺品をホームページで公開し、戦争の悲惨さと平和の大切さを後世に伝えていきます。



「富山大空襲から生き延びて」 山崎 百合子

富山大空襲体験文

昭和20年8月1日午後10時ごろ、米軍機が富山上空に現れ、そのまま過ぎ去りました。皆がほっとして就寝したその夜、8月2日未明、B29爆撃機が来襲しました。

当時、私は20歳。厳格な父と優しい母と5人の兄弟の7人で南田町に暮らしていました。皆が寝静まった深夜、突然の空襲警報に飛び起きた私たちが目にしたのは、焼夷弾による火の海でした。家族全員で防空壕に入ろうとしましたが、すでに多くの人で埋まり、そのまま中に入ると焼け死ぬのではないかと直感した両親と北の方向海、富山湾の方向へひたすら逃げました。当時6歳だった一番下の弟の手を握り、火の海、悲鳴の中を必死に逃げました。逃げる途中、母とはぐれてしまいました。私を呼ぶ声を見ると母が「田んぼに入れ」と叫んでいます。私達は母が唯、持ち出した夏蒲団を濡らして頭からかぶり、田んぼの泥の中にもぐりました。体の弱かった弟の唇は紫色になり、焼夷弾の落ちるプシュ、プシュという音と悲鳴の中、死を覚悟しながら泥の中で耐えていました。息が苦しかったのですが、母に「鼻に田んぼの泥をつめてこらん」と言われ泥を鼻に詰めると不思議に息が楽になりました。幸い田んぼの水が暖かかったので、長い時間入っていました。

夜が明け、空襲の音が静まり、田んぼから顔を出すと、あぜ道にいた人の多くは焼夷弾を浴び、亡くなっていました。田んぼの中に入ろうと

したのでしようか、上半身はなく、下半身だけの遺体もあります。私達は田んぼの泥の中に埋まっていたことで助かったのです。その後、私たちは住んでいた家の前で別れ別れになっていった父と次男に再会できるのですが、父が「生きていてよかった、生きていればいつか元の暮らしに戻れる」と言った言葉が今も忘れられません。

何か食べられるものを、と神通川へ向かった先には信じられない光景が広がっていました。川面はおびただしい数の焼死体で覆われています。まるで川逃げた人たちが恰好の標的とされ、集中攻撃を受けたかのように。遺体をうずたかく積んだトラックが荷台からぼろぼろと遺体を落として過ぎ去ります。まるで地獄絵を見ているようでした。夜になるとどこからともなく火の手が上がり、いたるところから火の玉が舞い上がっていました。家の近くの防空壕では逃げ込んだ人がみんな亡くなっていました。私達も防空壕に入っていたら命はなかったに違いありません。

あたり一面焼け野原で、食べるものをさがしても、小動物や虫さえいませんでした。口に入るものは何でも、雑草や松の葉まで食べました。8月の猛暑の中、野宿をして過ごしましたが、空腹の上、夜露に濡れ、体力はどんどん消耗してしまいました。

もうどうしようもない、と親戚を頼って新潟へ行きましたが、人に頭を下げたことのない父が家族を救うために親戚に頼らざるを得ず、肩身の狭い思いをしなければならなかったのは本当に辛かったです。終戦となり、私たちは富山にもどりましたが、元住んでいた場所には見知らぬ人が小屋を建てて住んでおり、ここは私たちの土地だと主張して

も、焼け野原ではその証拠もなく、悔しい思いでそこを離れなければなりません。

毎日が飢えとの闘いでした。戦後の混乱期、富山の町には闇市ができ、泥棒が横行、孤児の窃盗団もありました。配給はありませんでしたが、家族7人におにぎりが一個。父がどこからか見つけてきた、便器ではないかと思われる容器を洗い、鍋にして一つのおにぎりをおかゆにして分け合いました。

体の弱い赤ちゃんやお年寄りが次々に亡くなっていきました。先が見えず、まさに生き残るのも地獄でしたが、家族で励ましあい、絶対に生きる、という強い思いと希望を支えに生きながらえることができました。

戦争ほど悲惨で残酷なものはありません。国の指導者によって引き起こされた戦争の犠牲になるのはいつも、どこでも弱い庶民、子供、女性、お年寄りです。2週間、あたたかたの2週間早く戦争を終わらせていけば、富山の空襲も、広島、長崎への原爆の投下もなかっただろうと思ふと悔しくてなりません。

国や役所はいざというときには何も役に立ってくれませんでした。防空壕も竹やりもどれも私達を助けてはくれませんでした。

私を助けたのは、父が教えた生き抜くことへの強い思い、希望、母に教わった生き延びる知恵、家族の支えです。私は今でも、花火を見ると焼夷弾が白い光の輪を広げて落ちてくるのを思い出します。そうして90歳をとうに過ぎました。悲惨な戦禍の中を生き延びてこられた幸運に「生かされて」いることを感謝する毎日です。世界中から戦争がなくなることをいつも祈っています。

空襲時の体験文を随時募集しています。400字詰原稿用紙3～5枚程度にまとめて、市民生活相談課へ。

「平和の原点」

富山市立三成中学校三年

中村 涼香

涼香

私たちの郷土富山。自然豊かで空気が澄んでいるということは以前から言われており、最近では街も発展してきて、便利で暮らしやすくなっている。今となつては幸せな日常を過ごしているが、平和学習をしていく過程で、富山の先人達の尊い犠牲があつた上に成り立っていることを知った。

今から七十七年前、一九四五年八月二日未明、富山大空襲があつた。B29大型爆撃機七四機による一斉攻撃を受け、市街地の九十九％は消失。被災十万人、死傷者は二千七百人を超えた。私は学校の平和学習で空襲や原爆の恐ろしさを知つたが、終わった出来事、過去のこととしか捉えていなかった。しかし、修学旅行の平和学習を通して、まだ終わっていないのだと痛感した。

修学旅行では広島市の平和記念公園を訪れ、資料館を回り、ガイドさんと碑巡りをした。犠牲者の数を聞いてもいまいちピンとこなかつたが、資料館の人形を見たり、それぞれの石碑にまつわるお話を聞いたりする中で、見るも無惨で、聞くも悲惨な状態だつたのだと痛感した。ガイドの方は「平和の原点は人間の心の痛みが分かること」だとおっしゃっていた。また、被災された方は「人と人が助け合えることが

平和につながる」とおっしゃっていて、本当にそのとおりだと思つた。世界中の皆が人を思いやることが平和につながるのだと思う。

現在、広島市の平和記念公園では今でも毎日八時十五分に鐘が鳴ると聞いた。原爆で亡くなった方を忘れない、あの日のことを次の世代へつないでいく。平和記念公園を通る人は、今日も鐘の音とともに黙祷を捧げている。広島市民にとつて、今も原爆の記憶は残り続け、過去と今、そして未来へと平和への願いを届けている。

八月一日。北日本新聞開涼花火大会。富山で上がる大きな花火を、ただ綺麗だと思つていた私は、花火を打ち上げる本当の意味を知らなかつた。富山大空襲の犠牲者への鎮魂と平和や復興への願いが込められていたのだ。私たちの郷土富山でも、今でも戦争や大空襲の記憶を、過去から現在へとつないでいたのだ。終わっていない。

過去の出来事ではなく、未来へのメッセージを今も紡いでいるのだ。先人達の思いや平和への希求は、今なお私たちに語り継がれている。そして、そのバトンを私は次の世代へとつないでいきたい。五十年百年という時を超えて伝わってきた想いを、千年二千年先へ。受け継いできたものを、今度は引き継ぎ手として、未来の富山市民へ。

私の考える平和への原点。それは、時を超えた、平和を望む人々の想いの継承だ。

「人から人へ繋ぐタスキ」

中学生作文優秀賞

富山市立堀川中学校三年

田中 琉愛

琉愛

私は、富山大空襲について曾祖母からお話を聞きました。私の曾祖母は昭和六年生まれの九十歳で、ちようど私達の年齢くらいの時に富山大空襲を経験しました。

富山大空襲前日の夜には、上空からたくさん照明弾が投下され、アメリカ軍があたり一面を明るく照らし、偵察しているようでした。その様子を目の当たりにした曾祖母はとても恐怖を感じたそうです。

一九四五年八月二日の午前0時頃、上空に「B29」が現れ、百十二分間に及ぶ空襲が始まりました。約五十二万発の焼夷弾が投下され、富山駅を中心にあたり一面は火の海になったそうです。曾祖母は布団を被りながら、冷たい川の中で身を隠しました。

次の朝、家の周りは焼け野原になっており、悲惨な光景が広がっていました。近くの赤江川にはケガをして体を冷やした人々や避難した先で空襲に遭つた人など、たくさん遺体で埋め尽くされていたそうです。曾祖母の家は無事でしたが、富山大空襲の後も家の敷地にある防空壕に毎晩、防空頭巾を被つて避難しました。常に死と隣り合わせの恐怖におびえる日々が続きました。富山大空襲による犠牲者の人口比は、地方都市として最も多く、被災された方はおよそ十一万人でした。また、富山駅に停まつていた汽車が攻撃

に合い、中に積まれていたたくさんのお米がこぼれていたので、それを拾つて食べていたそうです。

富山大空襲から約八十年たつた現在の富山には、戦争の形跡はほとんどありません。そして、当時被災された方々からお話を聞くことも難しくなりました。そういった中で、曾祖母からお話を聞いたことはとても貴重な体験でした。曾祖母は若い頃のことばかり覚えていませんが、富山大空襲を経験した当時のことは鮮明に覚えていました。それは、幼い曾祖母にとつてとても衝撃的で悲惨な出来事だつたからだと思います。

いつもは穏やかで優しい曾祖母が富山大空襲について一生懸命私に語ってくれました。その姿から私は、戦争という悲劇を次世代に伝えてほしいという思いが込められている気がしました。曾祖母の世代の人々が絶望や怒りの中で希望を見出し、懸命に努力したからこそ、今の富山があります。富山駅前が再開されたら、南北が電車で繋がったり、富山市の様々な地域が活気づいています。発展し続ける富山市の過去に悲劇と人々の努力があることを決して忘れてはいけないと思います。前の世代からのタスキを次世代に繋ぐなければいけません。

私は、これからも当たり前前ではない日々、そして家族や周りの人々への感謝の気持ちを持って、毎日を大切に過ごしていきたいです。また現在、世界で起きている戦争が、刻も早く終わり、世界中で平和な日々が訪れることを願っています。

「桜に誓う富山の未来」

富山市立興南中学校三年

黒田 瑚子

瑚子

中学校生活三度目の春、家族と二緒に城址公園へお花見に出かけました。ライトアップされた富山城を見ながら母が教えてくれたのは、今日の前にある富山城は、第二次世界大戦後、復興のシンボルとして再建されたものだということでした。松川べりの桜並木もまた、江戸時代から整備されてきた樹が焼けてしまい、戦後に植え直されたのだそうです。

七十七年前の八月一日、富山大空襲。歴史ある建築物も、美しい松川べりの桜も、全てが焼け野原となつてしまつたという事実にとても驚かされ、強い衝撃を受けました。戦争は、人命や生活、笑顔を奪う惨いものであると同時に、先人たちが大切に築き上げ、守ってきたたくさんのおものを、瞬で消してしまふ悲しいものだと感じました。

テレビでは毎日のように、ウクライナとロシアの現状が報道されています。ロシア軍がウクライナの文化財や建造物を破壊したというニュースを耳にするたび、ウクライナの人々の辛い気持ちが痛ましく伝わってきます。

戦争、争いは、あつてはならないものなのに、どうして起こつてしまうのでしょうか。

人はそれぞれ違う意見を持つています。意見がぶつかることは当然のことです。根拠のない噂や誤解、思い込みで他人を判断し、溝が生まれることは学校の

生活でも起こります。

私は生徒会長を務めています。意見が対立してしまう場面で私心が働いていることは、対面して会話することで、自分の意見が正しいと過信せず、話し合ううちに両者が納得できる新しい意見が生まれるかもしれません。相手の話を聞くこと、自分の考えを伝えること、お互いを認め合うことこそが必要なのだと思はれています。

世界には紛争が絶えず起こっている地域もあります。国と国、民族と民族の間で意見が食い違ふことは当然です。文化や価値観が異なるからです。それを暴力や武力で解決させようとするため、争いがおこるのだと思います。耳を傾けて違う価値観を尊重せず、手を取り合わないことが大きな問題です。

焼け野原の状態から復興発展した富山は、豊かで活気のある場所になりました。心に大きな傷を抱えながらも発展のために力を尽くされた先人たちに感謝しかありません。次世代を担う私たちは、その思いを忘れることなく受け継ぎ、さらに素敵な富山にしていかなければなりません。思いやり溢れる温かい町をこれからさらに発展させていきたい、そして争いのない平和な町づくりをしていきたい、松川べりの桜を胸に焼きつけながら、私は考えます。花びらはまるで人々の心の声のようです。平和への道のりは一人一人の心がけ次第で達成できると思っています。周りの声を聞き、自分の声を届けること、それを忘れず私はこれからも富山の未来を見つめます。

式典

1. 富山市の紹介映像

2. 国歌斉唱

3. 黙とう

4. 開会あいさつ

富山市長 藤井 裕久

5. 中学生作文最優秀作品の発表

「平和の原点」 富山市立三成中学校3年 中村 涼香

6. 富山大空襲体験文の朗読

「富山大空襲から生き延びて」 山崎 百合子

朗読/声のライブラリー友の会 高井 典子

7. 代表献花

8. 閉会あいさつ

富山市民感謝と誓いのつどい実行委員会 会長 北岡 勝

